幼児といっしょに！エコBOOK

九電グループ
ずっと先まで、明るくしたい。

もりじいとなかまたち

なかよしきょうだいの みきちゃんは６さい、
だいちくんは８さいの元気な子。
ふたりとも大きな木の下が大好き。

ふたり「この大きな木は、おじいさんみたい。
森のおじいさんだから、もりじいってよぼうよ」
って ふたりで きめたのです。

まいにち がっこうや ようちえんが 終ってから
もりじいの ところに やってきて、うれしかったこと、悲しかったこと、
みんな はなして あげるのです。
ざわざわっと はっぱが ゆれたり、
そよかぜが とおったり、まるで ふたりのはなしに
うなずいて くれているよう。

ある日のこと、いつものように、もりじいの ところに やってくると・・・

みき　「森のなかまさん。こんにちは。」

だいち　「きょうも、木や くさ、どうぶつや とり、むしさんも 元気だね。」

ところが、もりじいは いつもより 元気がなく、かなしい かお。

みき　「どうしたの？もりじい」

もりじい　「ちかごろ、しぜんの なかまたちに、こまったことが おきているんじゃ。」

みき　「しぜんの なかまって？」

もりじい　「きみたちの まわりにいる なかまたちさ。気づいているかなあ？」

だいち　「へー、どんな なかまが いるんだろう？」

もりじい　「そうだね、しょうかいして あげよう」

もりじいの 太い枝が ふたりを のせて･･･。

ビューン

あっという まに 木のてっぺんへ！

もりじい　「おーい、雲くん。ふたりに 空のせかいをあんないして くれないか？」

雲さん　「まかせてくれよ、もりじい」

雲さん「ようこそ、空の国へ」
水玉さん「こんにちは。わたしは 川や海から 上がってきた、水玉というの。
よろしくね」

みき「こんにちは、雲さん、水玉さん」

雲さん「わたしたち雲はね、水玉たちが あつまって できているんだ」
だいち「ええっ！雲は、水玉さんから できているの？」
雲さん「そう。もっと 大きくなると、雨を ふらせることも できるんだぞ」
みき「そうなの？雨は、雲から ふってくるの？！」

そこへ・・・

シーオーツー「じゃまだ　じゃまだ　じゃまだーーー！」
と 空の むこうの くろい かたまりから
へんな声が きこえて きたかと おもうと、
みきたちの ちかくへ とんできました。

みき　「あなたたちはだーれ?」

シーオーツー　「わはは、おれたちはシーオーツー。たくさん生まれたあと、空をウロウロしているのさ」

みき　「あなたたちは、どこからやってきたの?」

シーオーツー　「ぼくは、こうじょうの えんとつ」

シーオーツー　「わたしは、ゴミを もやすところ」

シーオーツー　「ぼくは、くるまの はいきガス」

シーオーツー　「でんきをつかう、クーラーやれいぞうこ、テレビをみるときに生まれるなかまも いるんだ」

とシーオーツーたちはいいました。

水玉さん　「あなたたち シーオーツーの なかまが、空にたくさんやってきたおかげで、困ったことが おきているのよ!」　水玉は おこっていいました。

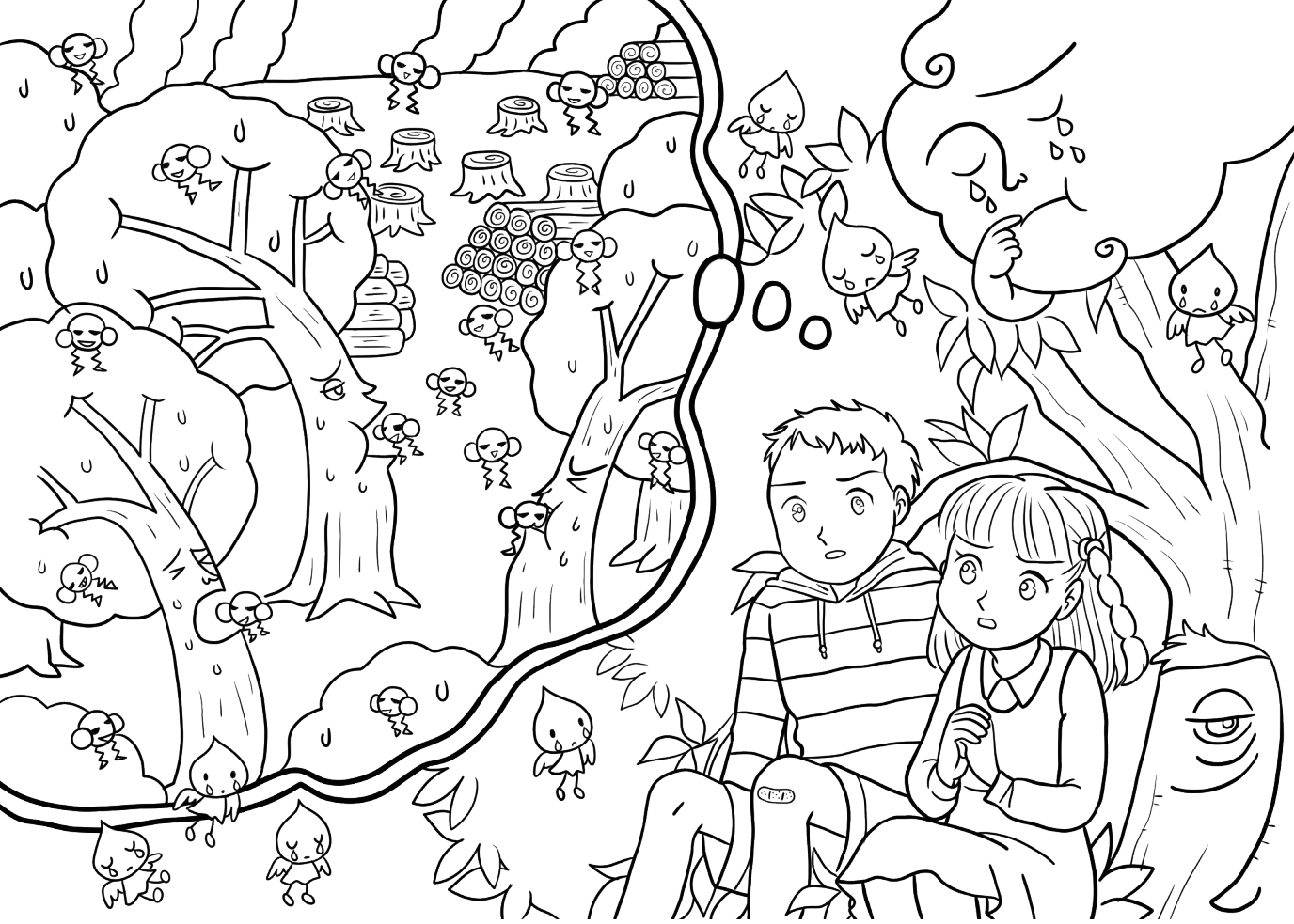
みき　「どんなことなの?おしえて」

水玉さん　「雨の日が つづいたり、ぜんぜん 雨がふらなくて、あつい日が つづいたり・・・」

だいち　「そういえば、むかしより へんなお天気がおおくなったってきいたことが あるぞ」

だいち　「よし、みき、シーオーツーたちを やっつけよう!」

だいちは はりきって とび出そうとします。

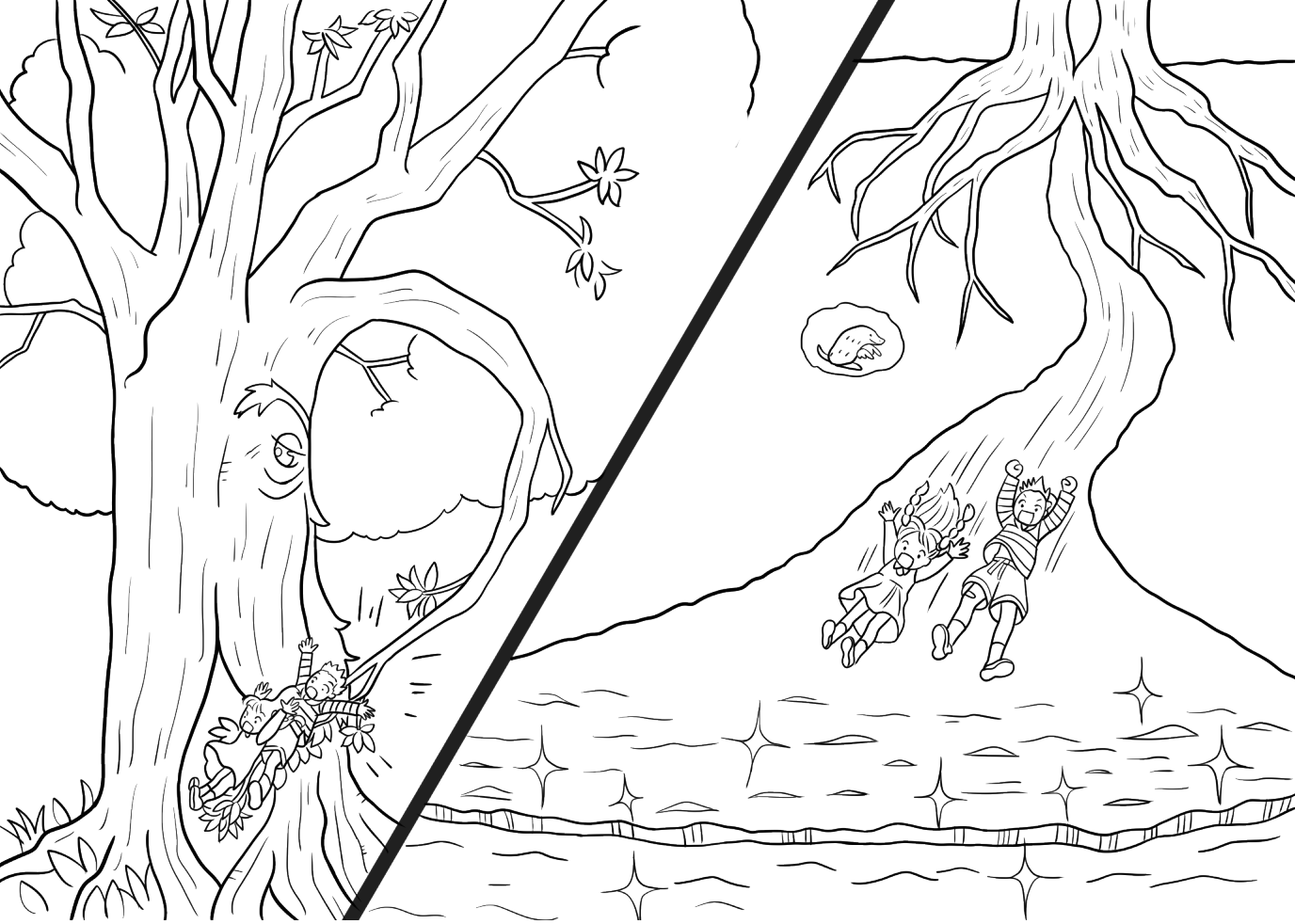


もりじい「シーオーツーは、ほんとうは わるいやつ じゃないんだよ。
わたしたち、森の木は、シーオーツーを いい空気に
かえることが できるんだ。
でも、もう わたしたちでは シーオーツーをすいこみきれなく
なってしまったんだ。 それは どうしてだと おもう？」
と もりじいが 悲しい声で たずねます。

だいち「シーオーツーを すいこむ森の木が へっているから…」
みき「シーオーツーが たくさん 生まれているから…」

雲も 水玉も みんな 泣いています。

だいち「そうか！シーオーツーを へらせば いいんだよ。
でも どうしたら、シーオーツーが へらせるんだろう・・・・・・・・？」
だいちと みきは、とほうに くれました。



もりじい：「こんどは、土の中にいる なかまの ところへ あんないしよう。
きっと、なにか いいかんがえが みつかるかもしれない。
さあ、こっちにおいで」

もりじいは、じぶんの 大きな あなに、ふたりをはこび、

シュルルル、シュルルル･･･。

ふたりは、どんどんどんどん、下へ、下へ！

あっ というまに じめんの なか。

みき：「わあ！きれい」

そこには、すきとおった きれいな水が、あちこちから わき、
そして ながれていました。

みき　「こんにちは。きれいな お水さん」

清流さん　「こんにちは。わたしは、土のしたを ながれる 清流よ」

だいち　「こんなところにすきとおった 水が ながれている なんて、おどろきだなあ」

みき　「清流さんは、どこから生まれたの？」

清流さん　「雨が じめんにしみこんで、しずくが あつまって、ながれになるのよ。
木のねっこが わたしたちを 育ててくれるのよ」

だいち　「へえ、もりじいたちの おかげ なんだ」

清流さん　「わたしたち 清流は、たくさんの なかまが あつまると、
この くらいところから、川や海へと ながれ 出していくのよ」

清流さん　「でもね、・・・」清流の めには なみだが あふれていました。

みき　「どうしたの？清流さん？」

清流さん　「シクシク、シクシク・・・・水の おともだちが だんだん いなくなっているの」

みき　「清流さんたちを たすけたいの。どうしたらいい？」

みきも ひっしです。

清流さん　「ありがとう、みきちゃん。ふたりに できることが あるわ。

森がふえると水のおともだちがふえるの。

だから木を たくさん うえて、森を もっと ふやしてほしいの。

それから 川や海に よごれた 水を ながさないでね」

だいち　「そっか！もしかすると、清流さんの のぞみは、

あの シーオーツーを へらすことにも ならないかな！」

清流さん　「そのとおりよ。森が ふえれば、シーオーツーを たくさん吸ってくれるわ。

ゴミを すてないこと、でんきをつかわないときはけすことも

大切なことね」

清流さん　「ふたりとも 力を かして ちょうだいね。さようなら」

だいち　「ありがとう！清流さん。ぼくたちが 守ってあげる からね！」

みき　「やくそく 守るからね！」

みきも だいちも かたく けっしんしました。

みき　「もりじいには、たくさんの おともだちが いるのね。
でも みんな 悲しい かおを していたわ」

もりじい　「そうだね。わたしたちの なかまが 元気に なるには、きみたちの
たすけがひつようだ」

だいち　「うん。ぼくたち、もりじいや しぜんの なかまの ために、できることは
ぜったいやるよ」

ふたり　「また くるね、もりじい！元気を だしてね！」

・・・

ふたりは、おうちにかえると、森や空や じめんのしたで
見たこと、きいたことを、おとうさんとおかあさんにぜんぶ はなしました。

そして、今でも、もりじいと やくそくした、
森を大切にすること、ゴミを すてないこと、そして、でんきを
つけっぱなしに しないことをかぞくみんなで 守り つづけています。

※物語の中で「家電を使用するときに CO_2 が生まれてくる」という表現をしていますが、これは子どもたちに分かりやすくするためのものです。実際には、CO_2 は発電時の燃料燃焼などエネルギーの使用に伴って発生します。